

〔論文〕

保守主義はなぜ失敗したか

——明治中期の保守主義者の場合——

荻原 隆

名古屋学院大学経済学部

要 旨

日本の保守主義は常に失敗に終わってきたが、私の考えでは、それは伝統自体に問題があるというより、思想者の伝統に対する認識もしくは評価、あるいはその両方に大きな錯誤があるためである。日本は地理風土的にも民俗環境的にも世界でもっともおだやか(平和)な国である。風土的には温帯に位置し、さらに島国の海洋性から、いっそう温和で、そして、山川平野すべてが小さく、可愛らしく、親しみやすい。次に、民族的に言うと、民族の興亡を経験しなかった唯一の(その意味で例外的に平和な)国である。これらの条件を備えた国は日本以外にない。思想者はここに着目して、平和主義という形で保守主義を作ることは十分可能だったのだが、国体論の通念や欧米的な価値基準に妨げられ、日本の伝統の正しい認識や評価に失敗したのである。

キーワード：保守主義，明治中期の保守主義者，志賀重昂，陸羯南，三宅雪嶺

Why has conservatism in Japan always failed?

——The case of conservatives in the middle of the Meiji era——

Takashi OGIHARA

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2018年10月31日

一 普遍主義と伝統的ナショナリズム

日本の伝統的ナショナリズムという意味での保守主義はなぜ失敗に終わったか、どう構想すれば展望が開けるか、すなわち、いかにすれば保守主義に広く深い伝統性と高い普遍性を盛り込むことができるかは拙書に書いたとおりであるが(『日本における保守主義はいかにして可能か』(平成二八年)), それをここでは伝統の認識と評価という観点から再度考えておきたい。日本の保守主義が客観的に見てこれまで不首尾に終わっているのは明らかであるが、それは日本の伝統自体の問題というよりも(もちろん完璧な伝統というものはなく欠陥は多数あるが)、思想者の伝統に対する認識と評価、あるいはその両方に圧倒的に問題があるためなのである。逆に言うと、思想者の伝統に対する認識と評価を是正すれば、保守主義の可能性は大きく開けてくる。もっとも、そういう面倒な、可能性の見込めそもない作業をやめ、日本の伝統に見切りを着けるという方向も十分にあり得る。

近代主義とか進歩主義と呼ばれる思想がそれであるが、よい意味での東洋主義もこの立場を取る(悪い意味での「東洋主義」は日本を盟主・覇権国とするいわゆるアジア主義)。これは、日本は当時のもっとも普遍性の高そうな、進んでいる、すぐれていると思われる文化・文明を受容し、できれば発展させるべきであるという考え方である。最先端は中国(儒教)文明だったり、インド(仏教)文明だったり、近代西洋(権利、自由・平等、立憲主義・民主主義、資本主義、科学・学問)文明だったり時代により様々であるが、日本の伝統の普遍化をあきらめ、その時にもっとも進んでいると思われるものを取り入れ、最初は模倣でもよいから、やがてそれを深め高め、世界に送り返そう、これがよい方法ではないかという立場である。近現代日本では西洋主義と(よい意味での)東洋主義はたいてい仲が悪いというか、東洋主義者は西洋主義を煙たがるのであるが、普遍的なものを普遍的なものと評価し、積極的に取り込み育てていこうという点では共通している。ただし、東洋主義者は古顔意識・本家意識が強いために、むしろその原理は古代に中国やインドから入ってきたものだが、西洋近代が総体としてインドや中国文明を圧倒的に凌駕していることをなかなか認めず、片意地を張って東洋にこだわるという悪い癖があるが、普遍性を尊重するという点では大きな共通性がある。両者とも普遍性の乏しそうな日本文明にはとうに見切りを着けているのである。

このように、その時点での最もすぐれているものを受容し、模倣から出発してもよいから、次第にその内容を高め、世界に送り返すという考え方が普遍主義ないし進歩主義であるが、そのプロセスの中で伝統を生かすと言うことは大いにあり得る。たとえば日本人は集団性や組織力が強く、器用で勤勉であるから、会社のために骨身惜しまず働き、「ものづくり」を中心として発展した日本経済がかつては世界経済をリードしたこともあった。今日でも日本人の「おもてなし」は外国人観光客に好評であるが、これは大きな構想力は弱い、細部に強い関心を示し、ていねいという日本人の特性をよく生かしている。豊かな経済や産業の振興(ようするに資本主義)は近代西洋モデルであるが、日本人の伝統的特性をうまく活用しているのである。しかし、そうはいっても、これは近現代化に伝統を生かしたと言うだけのことであって、もちろん西洋モデルの

せいぜいヴァリエーションにすぎない。

二 先験的原理と歴史経験的原理

本来の保守主義は、インドにも中国にも中東にも西洋にもない日本の深く長く広い伝統の中から普遍的原理が見つければそれに越したことはないが、ただちに原理ではないにしても、十分普遍化可能な素材を探し出し、育て高めて世界に送り出すところに成り立つ。これができるかどうか保守主義の成否がかかっている。できないなら保守主義はあきらめざるを得ないのである。かくして、近代主義者・進歩主義者や東洋主義者は日本主義・保守主義に見切りを着けてきた。しかし、ここには日本の根源的な伝統に対する①認識と②評価について大きな錯誤が横たわっているように思う。

たとえば、近代主義者と（よき意味での）東洋主義者はだいたい次のように考えている。日本の伝統の中をいくらさがしてみても、普遍性（世界性）を持った神も仏もいなければ、普遍的な原理、すなわち、法（ダルマ）や仁義とか道とか天理、あるいは自然法や自然権（とそこから導出される自由平等）も見い出されない。日本的な原理は存在していないのではないかと。たしかにこれは妥当な見解のように見える。けれどもよく考えてみると、ここには大きな錯誤があるのではないか。これら外国の神や原理はすべて先験的（形而上学）であり、換言すると時間空間を超越したところに成り立つ原理もしくは人格（イメージとしては立体的原理）である。我々も無意識のうちにこの外来の規範をモデルとしているから、つい日本の伝統にこの種のものはないということになってしまう。ちなみに言うと、周知のようにこういう形而上学性を克服しようとする考え方もあり、たとえば功利主義やロールズの正義論がそうである。これらは原理を論証的に導出・構築しようとするところに大きな特徴を持つが、変わらざる人間性（前者は人間の快樂・幸福追求を後者は危険回避を人間の一般性として前提する）から原理が論理的に引き出されている点でやはり超時間的・空間的である。

しかし、原理の作り方・導出の仕方はこう限定しなくてもよい。形而上学的・超時間空間的な原理は日本にないとしても、あるいは歴史的・経験的な原理は可能かもしれない。こう考えてみる必要がある。たとえば、明治啓蒙思想で言うと、西周や加藤弘之は儒教的・朱子学的原理を下敷きに近代西洋の学問を受け入れ、その原理的思考はあきらかに超時間空間的であるが、これに対し福沢の文明論は強い歴史性を持った原理である。もちろん、西や加藤は言うに及ばず、福沢は西洋主義者のチャンピオンで、保守主義者ではないが、このように空間軸ではなく、時間軸で探せば、普遍的原理の素材が豊かに発見されるかもしれない。同じ土俵で同じように勝負しなくてもよいということである。

三 いかなる伝統を探すか

この観点から日本の伝統を再検討してみる場合、もっとも困ることは日本の伝統なるものは多

様で多義的、時にいちじるしく分裂している。たとえば、神道や皇室の存在、あるいは武士道や儒教や仏教、芸術理念では「ものあはれ」や「わびさび」、現代では「高品質性」や「(心のこもったていねいな)おもてなし」などである。保守の政治家はよく教育勅語の復活を口にするが、そこに含まれている国体論と儒教はもともとかなり鋭く対立・矛盾しているものである。また、勅語の精神は仏教とは全然違うし、日本の芸術理念とも鋭く矛盾し、「高品質性」や「(心のこもったていねいな)おもてなし」ともまったく調子が合わない。民族は長い歴史を持つからは多様で異質な伝統を持つが、これだけ多岐にわたると、これらを統一的に説明できる伝統はなにか、もしくは、より根源的な伝統はなにかを考えてみたくなるし、根源的なものがあるとすればそれはなにゆえにかという説明が欲しくなる。この説明がないと日本の伝統の中心がわからないのである。

諸外国の伝統を言う場合はかなり事情が違って見えるように見える。たとえば、キリスト教が西欧社会の伝統であるという場合、それは二千年にわたって、社会の全階層に信仰されてきた。あるいは、ギリシャ精神も伝統であると言われるように、ギリシャの主知主義、ようするに世界の上あるいは内奥に神ではなく、原理を想定するこの合理精神はルネサンス期に復活して近代科学・学問として近代西欧の発展を支え(ただし、ギリシャ的原理は目的ないし意味であり、科学の因果的原理とは性格が異なるが、原理的思考という点で一致)、そして、近代科学・学問は今や世界精神となっている。もちろん、我々はそれをいちいちギリシャ精神のあるいは近代西欧精神のおかげなどと考えるわけではないが、近現代の科学や学問抜きには一日たりとも暮らせない。そうであるからこそ本物の伝統であろう。中東世界の伝統がイスラム教であり、インド社会の伝統はヒンドゥー教であると言う時も同じで、もしそれを取り去ってしまえば、彼らの社会は崩壊するか、少なくとも大混乱に陥るであろう。長く全社会階層に浸透し、今日も我々の生活を支え、それなしに社会が成り立たないものこそ真の伝統である。

我々のように長い歴史を持つ民族は必ず相互に矛盾する伝統や文化を抱え込んでいるから、ある時代とか階層とかにかなり支配的な伝統は多数あろうが、その程度の伝統では相反する伝統からの批判をたやすく受けてしまう。本質的に見えて意外にそうでない、性格の異なる伝統を持ち出されて甲論乙駁になりそうなものはいくらかもある。たとえば典型的な例は武士道である。これは主君と武士の主従関係を前提とする狭い人間関係、しかも上下のそれを前提とした倫理で、これは普遍化しようがないから保守主義の素材にはならないのであるが、そもそも本質的な伝統かどうかとも怪しい。武士は十世紀から十九世紀の後半までいたから、武士道も相当長い有力な伝統とは言えるであろう。しかし、武士という階層はいつの時代でも当然少数者である。その他多数は農民や町人で彼らは主君も持たないし、命がけで戦う義務もなく、そもそも命をかけるべき所領・知行がない。農民や町人が武士の気風から多少の影響を受けることはあっても、武士道を実践することは生活形態から物理的に不可能なのである。そして武士は江戸時代という世界に類例のない平和な時代を作り出して、武士道どころか武士の存在そのものを否定してしまった。武士自身も無聊をかこちながらすすすこのような自己否定に気がついていたのであろう。そうなると、武士道(戦闘者の精神)とはまったく異なるものが日本精神の奥深くに存在し、そちら

の方が本質であるということになる。武士道は有力な伝統であるが、根源的なそれとはとうてい言えない。

儒教や仏教も、これらはもちろん中国やインド原産であるという点は別にしても、この意味で失格である。たとえば儒教がなくても痛くもかゆくもない。一方、現代文明（いわゆる近代西洋文明）も外来であるが、それがなければ一日も生きていけない、国家社会を維持できないという意味で、受容されたのは儒教や仏教よりずっと新しいが、完全に本物の伝統となってしまった。仏教は儀式・祈祷・願掛けというような習俗としてはかなり浸透したが、彼岸における魂の救済、そのための内面的モラルとしてさほど浸透したとは言えない。西洋のキリスト教、中東のイスラム教、インドのヒンドゥー教にはとうてい比すべくもなく、かりに仏教がなくとも精神生活が完全に崩壊するわけではなかろう。過去に確実に存在し、今なお我々を深く支配し、それなしには生活が成り立たないと考えられるものこそ本当の伝統であろう。

このように日本の伝統の本質については、非常に混乱分裂しながら根源的なものかわからなくなっているのであるが、この点をよく自覚し、深い示唆を与えてくれる思想者がいないわけではない。それが津田左右吉である。もっとも、彼はなにが本質的とか根本的とか言っているのではない。民族の生活はきわめて多様で矛盾する要素を持ち、時代によっても変化するから、何か「凝固」したもの、「固定」したものがあわけではない（「寓言」、大正三年、『津田左右吉全集』第二二巻）。けれども、彼の記紀の研究や『文学に現れたる我が国民思想の研究』全四巻（大正五～一〇年）を読むと、ある根源的なものが浮かび上がってきているように見える。それは日本人の「平和性」、「おだやかさ」、「素直でやさしく叙情的なところ（芸術理念で言うと「もののあはれ」がこれに近い）」というように読める。神道（とくに皇祖神の系譜としての側面）や国体論や武士道でもなく、もちろん、儒教でも仏教でもなく、彼はおだやかで平和で叙情性の高いところに日本人の本質を考えていたと思う。津田はこう考える理由として、いくつかの理由を挙げているのだが、特に重要なのは、1:風土性（温和性）、2:民族性（民族の興亡の欠如）である。これは日本人が何であるかを考えるについての実に深い示唆である。

この点を少し整理・敷衍してみよう。1:日本は熱帯でも寒帯でもなく中緯度・温帯に属する。もっとも温帯という点で言えば、中国やアメリカの中心部も温帯である。ところが、中国やアメリカの大陸と違って、日本は海洋性という特徴を持つ。水は周知のように比熱が大きく、あたたまりにくく冷めにくい性質を持つから、中国やアメリカよりずっと温和であるという特徴を持つ。そして、文化が早く開け、日本の伝統が形成されたとくに西日本の風土は平野・盆地は狭く（悪く言うと息苦しい）、山は低く、その稜線はなだらか（山というより丘）、川は短く狭い。こういう「小さい、可愛い」という要素もどちらかと言えば「おだやか」なイメージに近い（少なくとも「雄大」・「偉大」という感覚からはほど遠い）。ただ、日本の外には海があるから、そこから広大な雄渾な気象が生まれても言いように見える。ところが、海は外洋で、朝鮮とくに中国とはかなりの距離があるから、日本の気候は海洋性であるにもかかわらず、古代地中海民族のような海洋民族にはなれなかった。かくして温帯・島国・風景がすべて小さく親しみやすいという三重ぐらいの意味でおだやかな風土を持つ国は日本だけである。しいて言うと、南半球のニュージー

ランドが似ているが、しかし、この国は新興国であるから、古い歴史を持つ国では日本しかないのである。

2:日本の周辺には強力な民族が存在せず、生存を脅かされるという経験がほとんどなかった。民族の興亡を経験したことがない世界でたった唯一の民族と言ってよい。(よかれあしかれ) これもきわめて特異である。

特にこの二つの風土民族的理由から日本人は長きにわたって平和でおだやかな歴史を持つことになった。日本人の誕生を縄文人と弥生人の接触・混交に求めそこから数えても、二千数百年、もし縄文時代まで遡れば実に一万年を超えて我々は平和を享受してきたことになる。大和朝廷による日本の統一・建国が比較的非軍事的になされ、古代が平和であったこと、平安時代前期の平和、世界に比類のない江戸時代の泰平、戦後の平和、そして、内戦は多数あったが、人種・民族・宗教(宗派)にまつわる極度に血塗られた戦争や、残酷な奴隷制度がなかったのは根本的にはそこにこそある。大陸諸国家とはまったく違って、日本だけがいわゆる国体(一系の皇室)を維持できたのも、異民族に征服された経験がなかったからである。

保守主義者はなぜここに着目しなかったのであろうか。日本には先験的な規範や形而上学的規範(もしくは人格、ようするに神)は生まれも作られもしなかったが、平和主義という歴史経験的規範を構想するに十分な素材を持っている。江戸期の国学者はもちろん、すでに儒者の中にも日本は道や法や教がなくても治まってきた、治まっているということに気がついていた者がいる(この点、たとえば渡辺浩『東アジアの王権と思想』(平成九年)Ⅲ-6参照)。本居宣長は武士が命を惜しまないと言うのは強がりだ、「もののおはれ」や「女々しい」のが人間(日本人)のまことであると主張しているが、これはなかなか日本の伝統の本質を言い当てている。しかし、彼らはここから新たな日本の原理を構想することはできなかつたし、なぜ日本が治まってきたのかという論証も不足している。彼らは日本人は生まれつき人柄が良いからだと考えていたようだが、これではトートロジーに過ぎない。なぜ、人柄が良いのかを説明する必要がある。江戸期の国学者や儒者にそれを求めるのは無い物ねだりではあるが、明治の保守主義者はどうしてこの方向で考えてみなかつたのであろうか。日本の歴史は保守主義の素材を十分に持っている、いな、それどころか歴史経験的な保守主義の可能性という点でこれほど豊かな伝統性を持つ国は世界にないと言ってよい、それはいわゆる先験的・形而上学的な、あるいは立体的な原理ではないが、歴史経験的な原理の可能性を十分に持つ。ところが、この点の理解で多くの保守主義者は失敗を犯してしまうのである。

四-1 陸羯南の場合—伝統の認識における問題

羯南は日本でもっともすぐれた保守主義者ということになっている。しかし、問題は彼の保守主義の中心が国体論であるということである。こういう観念がもっとも強く出ているのは『近時憲法考』(明治二四年、西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』第一卷)の第十、十二章あたりである。

「歐洲各国の文化は人民より起れり。而して日本の文化は常に皇室より起これ。(中略)夫の

儀式、宗教、家制、政事の類は言ふに及ばず、凡そ農業、工業、商業及び種々の工芸、事業に至る迄、何れも皆な朝廷の奨励誘導に出でたることは武門政治以前の歴史を一覧して之を知るに充分ならん。(中略) 維新以後今日に至る迄も亦た同一の關係を以て文化の進歩を來たし、文明の政道たる立憲政体の設立も亦た固より 天皇陛下の大御心に出でたるや言ふ迄もなし。是れ日本の立憲政体が他邦と其の起原を異にし、従て其の性格をも殊にする所以なり。(中略) 蓋し西洋諸国の君権は国約憲法又は国民権力に因りて制限せらるゝこと常なるが故に、之を最上無二の権力と云ふは固より不可なりと雖も、日本天皇の権力は斯る順逆を誤りたる有限の権力にはあらずして、日本臣民に向ては固より絶対的権力たるを失はず。只だ欽定憲法即ち天皇が親ら裁定し給ひて皇祖皇宗の靈に誓告し給へる所の此の憲法に向ては制限を受くる姿なり。外国の君権は臣民の為に制限せらると雖ど、日本の皇権は臣民に向て無限にして皇祖皇宗の謨訓に対しては有限なりとす。」(同 第十章「天皇の大権及皇室」)

日本が一系の皇室を保持してきたことは事実であるが、これが圧倒的で根源的な伝統かどうか、認識として妥当かどうかはまず問題である。国体論は国際観としては神の子孫である天皇家が代々支配するこの尊い日本、神国日本というような意味であろうし、羯南がこの神話をそのまま信じていたわけではあるまいが、まず、①政治的に言えば天皇親政ということになる。初期の大和政権のことはよくわからないし、天皇親政に近い政治形態があったと推測することはできないにしても、この体制とても基本的には豪族連合制(氏姓制)である。そして、蘇我氏の専横あり、撰閣政治ありで、古代の政治すらなかなか天皇親政とはいかなかった。大化の改新や、律令制の導入は天皇の権力を強めようとするものではあったが、うまくいかず、結局、貴族(藤原氏)が政治の実権を握ってしまった。ようするに豪族・貴族の専横に戻ったのである。そして、鎌倉幕府ができてからは、もちろん武士が政治を動かし、承久の変も建武の中興も朝廷側の敗北に終わり、武家の支配が明治維新まで長期に継続した。天皇親政という意味での国体論はむしろ例外で、この程度のことは中等レベルの歴史の知識があれば了解できることであろう。

また、国体論を②倫理的レベルで考えて、天皇に対する絶対的忠誠を他のすべての徳目に優越させること、いわゆる「天皇のために死ぬ」と理解するにしても、この意味での国体論の国民への注入が始まったのは、明治憲法が發布され、いちおう立憲政治体制が始まって、抱き合わせに教育勅語が發布されてからである。この体制は敗戦によって終了しているから、倫理的なレベルでの国体論は事実としては「近代的」で「短期的」現象である。もとより、いつの時代にも天皇のために死ぬことこそ日本人の本分と考えていた者はいたが、それはごく少数である。多くの国民も皇室を漠然と敬愛していたではあろうし、今でも親愛しているが、それはもちろん国体論ではない。これも中等レベルの歴史的知識があれば十分に理解できるところである。

そして、文化産業の発達はすべて朝廷の手によるものであろうか。古代において先進文化技術が朝廷やその周辺から広められたということはあるにしても、生産力や技術の進歩は言うまでもなく、武家文化や町人文化そして近現代文化は国民の自覚と努力によって成し遂げられてきたものであって、天皇家の指導を仰いだものでも仰ぐべきものでもない。

また、天皇を日本人が敬慕するのはよいとしても、それを諸外国に押しつけるわけにはいかな

い。国体論と世界主義はそのままではとうてい両立しない。羯南は伝統的ナショナリズムと世界主義はやがて調和すると言う。

「吾輩は国民の特性を保持発揚して日本の特立を明らかにし、併せて世界の文明に協力せんことを期す。(中略) 吾輩の目的は国民の統一及特立を鞏固にして以て世界の文明を計ることに力を致さんと欲するに在り。」(「国政の要義(三)」(明治二二年一二月), 前掲『全集』第二卷) 「此の時に当りて能く国民的の独立を保ち、且つ人類の博愛を失はざるは、吾人の任務にして其事決して容易ならず。」(「世界的理想と国民的観念(一)」(明治二三年一月), 前掲『全集』二)

「夫れ国民的観念と世界的理想は必ずしも相衝突するものに非ず。其外観よりすれば一時或は相容れざるが如きことなきに非ずと雖も、是れ其偏傾より生ずる余弊なるのみ。真正の衝突に非ず。(中略) 要するに国民的観念も亦是れ世界的理想に達する進化路のみ。今日に在りて進歩の秩序は未だ人類が一蹴して理想世界に達するを許さざるのみ。」(「世界的理想と国民的観念(二)」(明治二三年一月), 前掲『全集』二)

「国民的精神は世界即ち博愛的感情と固より両立するに余りあり。(中略) 国民天賦の任務は世界の文明に力を致すに在りとするれば、此の任務を竭さんが為に国民たるもの其の固有の勢力と其特有の能力とを勉めて保存し及び發達せしめざるべからず。」(「近時政論考」(明治二四年)「第四期の政論 第六 国民論派」, 前掲『全集』第一卷)

羯南の少なくとも当面の関心が日本の独立と発展にあったことは間違いないが、その国民主義に正当性や妥当性を付与したいがために、こういうことを言ったのであろう。羯南が世界主義者であるとも思えないが。しかし、それはおいても、国民の特性に国体論を抱えたままで世界的理想に協力することができるであろうか。羯南の言っていることは実現性として不可能である。

ただし、ここでもし羯南がなぜ諸外国の王朝はすべて終焉・交代を繰り返したの、日本に国体、すなわち一系の皇室が存在しているのかという歴史的理由を考えるとできたならば、大きな展望が開けてくる。この点を見事に分析したのは津田であるが、それを踏まえると結局、日本に一系の皇統が続いてきたのは民族の興亡がなかったから、王権が異民族との大戦争というきわめて大きな危険を伴う決断をする必要がなかったからである。内戦はまだしも、異民族との大戦争に敗れば、王朝はもちろん民族の生活も破滅する危機を迎えるが、それがなく、ようするに平和だったからである。この点に思い至ると国体論(その由来は平和)・保守主義が世界主義・普遍主義と結合する有力な契機が見えてくるが、日本の保守主義者はアプリオリに一系の皇室を前提とし、その由来理由を考えないところが学問的でない。羯南はジャーナリストであり、学者ではないと言ってしまうればそれまでだが、そこが日本の保守主義の大きな弱点である。

四-2 三宅雪嶺—伝統の認識と評価の問題

雪嶺も当然皇室に対する尊敬の念が強く、この点で羯南と同じである。ただ、若き雪嶺はだからといってさすがに羯南のようにアプリオリに国体を日本の伝統の中心に据えることができなかった。国体の神話をすべてそのまま事実として受け取ることに学問的な疑問を感じていた。こ

これは最初期の『東洋学芸雑誌』第一六～七号に載せた「日本人民固有ノ性質」・「同(続)」(明治一六年一～二月)や『日本仏教史(第一冊)』(明治一九年),あるいは『筆之力』第一,二,五号に載せた「我国古代の人民の世界開闢に関する意想」,「吾国古代の歴史は何程迄憑信すべきや」,「同(続)」(明治二二年五～六,九月)などに頻繁に現れており,記紀については事実の考証が必要であると述べて,さすがに新時代の気鋭の学士らしく,学問的でもあり,良心的でもあった。文明開化・欧化主義の時代に記紀の神話を無批判に持ち出して,神がかりのおかしな人間と嘲笑されるのも気が引けたであろう。

また,彼には事象を歴史のプロセスで説明するような状況的・現状肯定的思考と,逆に理想主義ないし世界性やアジア性を掲げるところがあり,この理想主義からも国体論をとれなかったという事情があろう。たとえば「日本人民固有ノ性質」・「同(続)」,や『真善美日本人』(明治二四年)は日本人の特質を広くアジア人の特徴として考えようとしている。日本人は中国人やインド人とは違う環境や歴史を持つから,こういう思考方法が妥当とは思われないが,これも雪嶺が常に広い世界を意識していた現れであろう。そのため,おそらく国体論が広く世界性やアジア性を持つかどうか,妥当性を持つかどうかについて当初は相当の疑念が払拭できなかったこともあったと思われる。この点でも初期の雪嶺は理想的,良心的である。羯南も保守主義はやがては世界性に一致するという主張をしてはいるが,当面の目的が日本の維持発展にあったことは明らかであり,また欧米諸国の侵略性やその文明の虚偽性に強い警戒心を持っているが,これに対し,雪嶺は羯南以上に日本の世界性への貢献に強い関心があったように見える。『真善美日本人』の「序」やとくに「凡例」はこの意味で評価されてきた。雪嶺作と断じてよい『日本人』第五九号の「日本人」の革新」(明治二三年一一月)もその好例である。

しかし,雪嶺は日本の伝統の中心に何を据えるのかということがまったく打ち出されなかった。国体論を設定することはできないとして,その代わりになにを持ってくるべきか。この答えがまったく書けなかったのである。彼の作と思われる「余輩国粹主義を唱道する豈偶然ならんや」(『日本人』第二五号,明治二二年五月)や彼の作と断じてよい「日本人」の革新」(『日本人』第五九号,明治二三年一一月)がそうであるが,『真善美日本人』でもまったく同じで,なにが日本人の特質なのかまるで浮かび上がってこない。日本の伝統性と世界的理想を結合させたいと言っても,伝統には世界性や近代性に相反するものも多く,むしろそれが伝統性の本質であるから,的確な伝統を見つけ出さないとこの作業は不可能なのである。『真善美日本人』は真・善・美の三分野におけるこれからの日本人の奮闘努力を大いに願っていて,それはよいとしても,「日本人の任務 一」「真」の部も「(同) 二」「善」の部も欧米をモデルとし,なんとかそれに追いつけないかと苦悩しつつ,日本人のこれからの活躍に声援を送っているが,同じ土俵の上で相撲を取るなら,無理に国粹主義者になる必要がまったくない。近代主義者で行けばよいのである。

いくらか日本人の特色に触れているように見えるのは,同書の「(同) 三」で「美」を論じたところである。同書末尾に志賀の詩が添えられており,おそらく雪嶺は彼の影響を受けたのであろう,日本人の特色を「美」にあると考えてみたのである。けれども雪嶺はやはりこの「美」の伝統に自信が持てなかった。

「然りといえども邦人が美術に適するの資格あるは、さらに疑うところなし。(中略) 孤高いまだし。沈痛いまだし。通してもって特色と称すべきはただその軽妙の一語ならんか。要するにわが国の美術やもとより偉大宏壮なるものありといえども、概するに手軽くさらさらとして軽妙に渉るの風ありとす。(中略) すでに然り。わが美術の美を宇内に発揚せんは、はたして如何の方策を取るべきか。邦人の特質たる軽妙をしていよいよますます発達せしめんか。そもそも他邦の美、我に順応せるものを取り、これを涵し、これを育し、これを培し、これを磨し、もってついにわが特色と化成せしむべきか、念うにふたつながら策の非なるものにあらず。(中略) たといその特質にして口を極めて称揚すべきものにあらずとするも、非難を容るるの余地なからんには、ますますこれを宇内に撒布せよ。これまた人類の美を極めるにおいて一箇の手段なりと謂うべきなり。」(鹿野政直編『陸羯南 三宅雪嶺 (日本の名著 37)』)

「軽妙で淡泊(さらさらとしている)」なところが日本人の美意識であると言いながら、この程度のものがほんとうに世界に誇れるか強い懸念を持っている。同書の続編『偽悪醜日本人』(明治二四年)の「醜」の部では本音が出て、「軽薄」「浅薄」「小器用」な日本人の美意識を強い嫌悪の対象としている。雪嶺は志賀の影響を受けて多少気が乗らないまま、伝統の中心を「美」に求めてみたが、「軽妙」「小器用」なだけのものに満足できないし、自信も持てなかった。もし雪嶺がなぜ日本人の美意識は「淡泊」なのかという由来・根拠を考えると、実はこの理解は必ずしも不当ではないし、伝統の問題をもっと深めて理解することもできたのであるが、西洋の美の「偉大宏壮」を標準としているために、日本の伝統の真の特色が理解できなかったのである。日本の伝統が理解できないまま、同じ土俵で勝負すると、結局こうになってしまうのである。雪嶺は『偽悪醜日本人』(明治二四年)の最後に「模倣に終始して、劣等なる欧米」となってはならないと言っているが、雪嶺の考え方は残念ながら矮小化された欧米化そのものである。

後年、雪嶺は国体論者になるが、日本の伝統を的確に認識も評価もできなかったツケが回ってきたのである。国粹主義者としてなんとか伝統の中心を探そうとすれば、こういう通念に回帰するより仕方がない。彼は「日本及び日本人の長所短所」(昭和一〇年九月、『人の行路』所収)で日本はイギリスとは違って大陸からある程度離れているから異民族の侵攻を受けたことがないと説いており、これは初期の日本人をアジアの一員として考えようとする態度とはまったく逆である。日本の伝統を考える上で重要な指摘であるが、日本の異質性を国体の神話に置き対外的領土拡大を賛美し、使命と見なす結果を生むだけであった。当初の世界性・理想性から超国家主義に変貌したのであるが、悪しき意味でのアジア主義者になってその理想性・世界性を自分自身になんとなく納得させ、満足していたのであろう。

そうしてみると、雪嶺は理想主義を気取ってはいるが、本質的には状況主義者である。それも日本の近代化がうまくいくかどうかかわからない時期には自信がなく、対外的拡張が進展し出すと急に元気が出て、自信たっぷりになるタイプである。本当に確固たる理想や見識を持つ思想者は状況の不安な時こそ日本の伝統のすぐれた点を指し示して国民を励まし、近代化が順調に進展し始めた時にこそ逆に国民に自戒や反省を促すだろう。とくに保守主義者はそうあって欲しい。しかし、日本の伝統を的確に認識も評価もできなかった雪嶺は在野的という意味で一貫性はあるが、

時代に屹立する保守主義者にはなれなかった。

四-3 志賀重昂—伝統の評価の問題

志賀は雑誌『日本人』の主筆であり、「国粹主義」という言葉自体その造語であろうから、保守主義の本家本元のように思われてきた人物である。しかし、彼は本質的には国粹主義者でも伝統的ナショナリストでもなく、近代的ナショナリスト、英米崇拜者にして外交的には協調主義者・平和主義者であり、時にインターナショナリストないしコスモポリタンと思われるところすらある。それは彼の生涯が世界を股にかける大旅行家であり地理学者であったということにもよく現れている。かなり後年になるが、移民・在留邦人が自国や自分の家族への忠誠を優先させ、とかく外出先国で嫌われるのはまずい、まず、その国の制度を尊重し、その国の人々を愛すべきだと論している（「加州排日問題の今後」（大正四年一月）、「米本土及布哇在留日本人の教育」（大正初期と推定）、いずれも、志賀富士男編『志賀重昂全集』第一巻）。当時としてはもっとも国際的な人物であり、世界市民でもあったのである。

ところが若き志賀は保守主義の『日本人』の中心となり、「国粹主義」という言葉の生みの親として出発したのであるが、それは、彼が概念や論理に弱く、主義主張の緻密な構成に比較的無頓着であったこと、明治政府に対する複雑な心情のほか、とくに人間関係なかんずく世話になった杉浦重剛や宮崎道正との関係などが背景にある。彼はおそらく信条的には多少心ならずも保守主義の陣営に身を投じたのである。

これが原因でその掲げた「国粹主義」は大きな混乱をきたすことになった。彼は日本の国粹を伝統の維持発展であり、その中心は「美ないし調和・平和（調和としての美）」であると言いながら、一方でそれを「近代化・国力の充実（たとえば殖産興業）」でもあるとも説明をしてしいる、国粹主義が伝統の保存と近代化・欧米化という両義性を帯びており、論理的に完全な破綻をきたしている。伝統の一部が近代化に役に立つということはあるが（その場合は伝統のどの部分がそうなのか明確に説明しなければならない）、両者は一般に鋭く矛盾する。だから伝統は伝統なのである。近代化・国力の充実に相当の問題が生ずるのを覚悟してでも伝統を保存発展させようというのが国粹主義であろう。いわゆる欧米化とはあえて重要な部分で異なる国家社会のあり方を求めるのが保守主義の真骨頂ではないか。ところが、志賀の本音が出てしまったために、その国粹主義は伝統主義なのか近代主義なのかまったくわからなくなってしまった。

この矛盾は『南洋時事』（明治二〇年）と並ぶ代表作『日本風景論』（同二七年）にもそのまま持ちこまれてしまった。日本は中緯度・温帯でしかも島国・海洋性であるから、鮮やかな四季があり、そして、自然風景がすべて小さく可憐で、おだやか、親しみやすく、優美なところに最大の特徴がある。とくに文化が早くから開け、伝統が形成された西日本はそうである。日本には古来、すぐれた抒情詩・抒情文学を輩出してきたが、それはやさしく、優美な風土と大きな関係がある。

ところが、志賀はこのような花鳥風月の美が気に入らなかった。こういう景観の中に生きて

いてはたくましい進取の精神が育たない。そこで、無理に無理を重ねて日本の中から雄大・偉大な風景を探し出そうとしたのである。那須が広いとか、那智の滝が壮大だとか、千島の火山が太平洋上の筍岩が怪異だとか、辺境的・異境的な風景を一生懸命に探すのであるが、どう力んでも日本の景観はスケールの点で大陸や欧米にかなうわけがない。しいて言うとな日本の外周は海で、開拓者的な冒険者的な心をそそるが、それは地中海と違って外洋であり、しかも大陸の諸国とは相当の距離があるため、海洋国家にもなれなかった。奈良や京都の周辺に荒々しく雄大で開拓者精神を覚醒させるような風景は存在しないのである。

志賀は皇室に相応の敬意を持っているが、当時の常識的なレベルで、当然国体論者ではない。彼が伝統的モラルとしてもっとも惹かれているのは武士道であるが、これは格別忠孝のような情誼の関係が懐かしかったからではない。この点でも国体論を基礎に社会の情的関係を好む羯南とはまったく違う。志賀は武士道の「覇気」の部分が高く評価したからである。長篠の戦いにおいて味方を鼓舞するために壮烈な死に方を選んだ鳥居強右衛門をアラモの勇士になぞらえているようにその勇氣・気概、なすことあらんとする気力に感じたからである。これこそアングロサクソンの魂である。大洋に乗り出し、荒野を開いて植民地を作り、果敢に貿易を営み産業を起こしてきたのは、実にこの敢為・気力である、こういう事業をなそうという勇氣が日本人には足りない、志賀が民族を強く批判するのはこの点である。

これは日本人のとらえ方・認識という点ではなかなか的確である。そして、その由来をいちおう考えている（風土に求めた）点で、たとえば国体論の由来を考えない保守主義者よりもすぐれている。ただし、問題は伝統の評価の仕方である。志賀は本居宣長とは違って、日本人の柔弱・女々しさを嘆くのだが、女々しいと言ってしまうだけでは国粹主義者になれない。日本人の女々しさを、時に厳しく批判してもよいから、それを日本人のおだやかな平和な性格と評価して未来に生かそうとすると国粹主義が成立する。彼はほぼ一貫して国際主義者・協調主義者であったが、これは武力主義・植民地支配は必ず嫌われる、また、米英と事を構えれば破滅であるという見事な予見から来ている。もし彼がその協調主義・平和主義を伝統とも結びつけていたら、まことに偉大な思想者・保守主義者になっていたことだろう。

五 結語

保守主義の不毛が叫ばれて久しいが、それは日本の伝統が不毛であったわけではない。日本人の伝統の起原を縄文時代に置けば、実に一万年以上、縄文文化と弥生文化の結合から数えるにしても二千数百年にわたって、日本人は平和を享受してきた。平和主義という形で保守主義を作ろうとすれば、これ以上に保守主義の風土と歴史に恵まれた国はほかにない。ところが、近代主義者や東洋主義者は時空間を越えた原理もしくは原理的人格（神）がないとあきらめ、保守主義者は保守主義者で伝統に対する認識か評価、あるいはその両方に大きな錯誤や誤解を犯した。日本の保守主義の成立を阻んだものは伝統の内容自体ではなく、思想者の側の認識や評価の誤りなのである。